

ひたむきな星屑

柳生二千翔

◆登場人物

小山青子…元OL。東京から里帰り。親戚とは仲違いで、絶縁されている。

小山加絵…青子の姪。多くの男と寝ている。サービスエリア（SA）のアルバイト。

大沼豊…SAの社員でチーフ。青子とは中学時代の同級生。

水間幸太…同僚。SAのアルバイト。体力がない。

赤澤春子…クレマー。夫とSAに遊びにきて、後に世直しに来る。

斉藤俊哉…加絵の彼氏。フラれる。

櫻井翔…芸能人を名乗り、迷惑メールを送ってくる。

男…加絵と寝ている通りすがりの男。

※「櫻井翔」の役名は変更可能。迷惑メールにありがちな著名人の名前を当てはめる。

◆場所と時間

二〇一七年の秋から冬にかけて。豊かな緑色の町並みから、冬の白い町並みに変わるまで。渋滞のテールランプの赤い灯りの線が、いつもそこに寄り添う。

朝日ヶ丘は、群馬県郊外に位置し、街全体が盆地にすっぽり収まっている。十三年前に新しい高速道路が敷かれ、街の中央に大きなサービスエリアが置かれた。そこは次第に発達し、今では町の主産業になっている。昼は一般人が多く利用しているが、深夜は大型トラックばかりが走っている。

朝日ヶ丘自体には、高速道路の入り口は存在しない。道に入るには丘を越えて隣町に行かないといけない。この街は、入り口でも出口でもない。

0

青子が現れる。国道沿い。黒く、真新しいアスファルトの上。足で地面を確かめている。

1

《黒い石について・国道沿い・カフェ》

青子 新しいアスファルトの匂い。湿気。熱。で、できている、らしい。この辺り。さっき、間違えて工事中の道に、片足入ってしまった。そっと足を引き戻すと、粘つとした黒い石が少し、付いていた。ネバっと。一つ落ちるまで、足は上げたままだった。

足をしばらく上げたまま、やがて下ろす。

加絵、斉藤がカフェに入店。遅れて青子も入店。

青子 夜。羽織ものがあっても少し冷えてきたので、私は国道沿いにある大きなカフェに入った。小綺麗で、天井が妙に高かった。何のひねりもない普通のココアを頼んで、でも可愛らしい子が作っているその様子を見ていたら、何となくスペシャルなものにも見えてきて、結果、私は少し嬉しくなりながらカウンター席に座った。味はやはり普通だった。ホッと和む。再開発地帯らしいこの辺りは工事現場だらけで、その場所ごとにオレンジの誘導灯が点

滅していて、それに何となく目を向けながらスマートフォンの画面を光らせる。メールは来ていなかった。

スマートフォンの画面がこうこうと光っている。

青子 一番近くにある誘導灯はここを迂回しろ、という感じで強く右の矢印を向けている。けれど、その次の誘導灯でまたすぐ左だ、またその次に左いつて右だ、という感じで、様々な場所に、文字通り誘導しようとしている。あっち、こっち、そっち…。

泣き始める斉藤。

斉藤 わんわんわんわん。

青子 え。

ため息を吐く加絵。

加絵 目の前で大声で泣き始める斉藤を見ながら、ああ、こいつの口元って何でこんなに汚いんだろうって、冷静にそんなことばかり考えていた。さっきまでパスタをムチャムチャムチャムチャ、口と歯のどこからその音なってるのかよく分かんなくて、え、信じられない、って冗談混じりに言ったら、「そう、美味そうに食べるでしょ、よく言われるんだ」って言ってきて、は、頭おかしいんじゃないの、キモ無理もう会いたくないって言ったら、わんわ

ん、全力で泣き始めた。最初からそういうところ、無理だったなあ
っていう、最近ぼんやりしてたから、見切るタイミング、ミスっ
ちやつたなああっていう。

斉藤 わんわんわんわん。

少し離れた場所からその様子を見る青子。

青子 店内に野太い声が響いている。最初、あまりにちゃんと「わんわ
ん」言っているから犬かと思った。割とむさい男の子だった。こ
の季節にタンクトップは、いくら上からジャケット着てても寒い
んじゃないかしら、とか思いつつ、あまりジロジロ見ているも仕
方ないので、もう一度スマートフォンディスプレイを光らせ
る。通知が来ていた。

櫻井翔からメールが届く。

櫻井 『こんばんは。櫻井翔です。いきなりメールしちゃってごめんね。

実は今、凄く辛い時期なんだ…。一人で抱え込み過ぎた悩みで、
ここ最近で一気に病んじやって…、元々鬱までは行かないんだけ
ど、ほら、俺って自分一人で抱え込んで落ちる所まで落ちちゃう
タイプじゃん？ 潤とかニノにも相談に乗ってもらってるんだけ
ど、最近是个々の仕事が皆忙しいから、ゆっくり話せなくてさ。
相談に乗って貰えないかな？ ここにURL貼るから、返事はそ
こでお願い。』

青子 迷惑メールだった。

加絵 うるさいよ。マジで。

斉藤 え。

加絵 いい加減にして。うざい。飽きた。

斉藤 そんな、まだ四日しか付き合っていないのに。

加絵 もうお腹いっぱい。

斉藤 そンだけで、俺の何がわかるんだよ。

加絵 わかるよ。ってか一時間で大体分かるよ。

斉藤 ひでえ。

加絵 バイバイ。

斉藤 ちよつと待てよ。

加絵 結構やらせてあげたんだから、むしろ感謝して欲しいんだけど。

斉藤 …。

加絵 さよなら。

席を離れる加絵。店の外に出る。

青子 男の子を置いていく女の子の目元は綺麗に盛られていて、私も男
だったからクラってくるのかなあとか、そんなことを考えながら、
あ、ココア美味しい。

加絵、店の外でふらふら手持無沙汰。

加絵 店を出てから、あ、そういうば、あいつの車でココ来たんだった

なあ、帰りめんどいなあ、またミスったなあ、と気づく。…駐車場に大人しく停まっているシヤコタン。可愛い。とても可愛い。

この子に罪はないから戻って聞いてみるかあ、と、ふと窓越しに店内を見たら、俊哉の位置に被さるように女の人がカウンターに座っていた。

加絵、青子と目が合う。

加絵 あれ。

加絵、青子だと認識する。

青子のスマートフォンから通知音が鳴る。

大沼が現れる。

加絵と斉藤は退場する。

2

《面接について・メール》

時間が進む。青子と大沼、それぞれの自室にいる。

以下は、メールでのやり取り。

大沼 どうも。大沼です。メールにて失礼します。面接、お疲れ様でした。

先ほどはビックリしましたね。本当に中学校以来ですよ、同窓会とかも来られないです。また会えるとは思いませんでした。ところで僕は、季節の残り香、みたいなものが好きです。余韻って言うんでしょうか、去ってしまったものへの哀愁というんでしょうか。今だと、夏から秋にかけて、トンボばかり飛んでいるところに、何故か蝉は鳴いていたりとか、そういうのです。風流、とはまた違うのかもしれませんが。青子さんがここに戻ってきたことで私は、それと似たような気持ちになりました。

青子 そうですか。

大沼 ええ。そういうばご存知ですか。青子さんが引越してから、こちら辺、化石が出るようになったんですよ。もう見かけたかな。

西の、昔、スーパーマルヨシがあつた辺りに、博物館ができました。開発の時に町中の土をバーって掘り返して、そこでたくさん化石発掘されて、ああいうのが建ったんですけど。

青子 そうなんです。

大沼 青子さんはどんな化石が好きですか。

青子 特にありません。詳しくないので。

大沼 そうですか。僕はサーベルタイガーが好きなんです。小さい頃図鑑で見てね、牙がニューって生えててカッコいいじゃないですか。まあルックスですね。こういうのです。(画像添付)

青子 見たことあります。

大沼 サーベルタイガー。身体が大きくなって、しかも後ろ足短いから、

速く動けなかったらしいんですよ。だからマンモスとかゆったりとした大きな動物しか狙えなくて、氷河期になって絶滅しちゃったんですね。でも強敵にしか挑まない、その姿勢、ちよつとカッコいいなーって思ってた。男って感じで。日本人ぽくないですか、足が短いところも。

間。

青子 スーパーマルヨシって、そんなのありましたっけ。

大沼 え、ありましたよ。覚えてないの？ 屋上に子供用の遊具があった、コイン入れたら大きな動物の乗り物が動くやつ。僕は乗りませんでした。覚えてないですか？

青子 覚えてないです。

大沼 あれ、おかしいなあ。青子さん何部でしたっけ。中学のとき。

青子 あの、大沼さん。一つ聞いてもいいですか。
大沼 はい。

青子 面接の結果、教えていただけませんか？

間。

大沼 受かっていますよ。おめでとうございます。

青子 ありがとうございます。では、いつから働きに行けばいいですか。
大沼 明日からでも。しかし、休日でイベントも多いので、かなり忙し

いかもしれません。いかがですか？

青子 私の方は大丈夫です。

大沼 承知しました。それでは明日十時、事務所にいらしてください。

青子 はい、それでは、これからよろしく願います。

大沼 よろしく願います。

やがて空間がサービスエリアのフードコートになっていく。

加絵、水間が現れる。大沼、退場。

3

《オリエンテーション・サービスエリア》

昼過ぎのサービスエリアのフードコートにて。

レジカウンターや客席などがある。

レジカウンターにいる青子、加絵、水間。

水間 塩ラーメンと湘南カレーがオススメです。

青子 はい。

水間 オススメ聞かれた場合、基本的にそう言うっておけば、外れないの
で。

青子 はい。

加絵 みんな好きだもんね。男の子っぽいメニュー。

水間 ハンバーグカレーも悪くないです。
加絵 あー、そうだね。
青子 それ、実際に美味しいんですか。
水間 悪くないですよ。ねえ。
加絵 うん。湘南カレーなんかここ湘南でもないのに湘南っていうのもウケるし。
水間 大沼つけたんでしょ、アレ。
加絵 え、そうなんだ。ウケる。
青子 何か湘南っぽいところあるんですか。
水間 ホタテが入っていて。
青子 あー。
水間 …まあそれぐらいかなって思うんですけど。
青子 あー。
加絵 空いてる時、まかないとかで食べたなら良いと思うよ。私作れるし。
青子 うん。ありがとう。
水間 お前、調理場出禁じゃん。
青子 え。
加絵 ああ、そうだった。
水間 そんなに皿持てないんですよ、手が小さいから。でもよく無理して。
加絵 料理もろとも、ばーんって。
青子 あらら。
水間 もう入んなって感じで。

加絵 うっさい。
青子 はは。
水間 まあ、正直、覚えることはたくさんあるんですけど、今色々言ってもね、やりながら覚えた方が早いで。とりあえず商品の配列とか、レジの使い方とかだけ覚えていただいたら、基本的には良いかなくて。…やったことありますか？ こういうの。
青子 レジは昔、少し。
水間 まあ大体同じですよ。
青子 そうかな。
水間 はい。
加絵 こいつテキトーだから。
水間 そんなことないですよ。
加絵 でも、ここ、サービスイリアの中では、そんなに忙しくない方だから、楽だと思うよ。
青子 そうなんだ。
加絵 だってお客さん、少ないですよ。
青子 …まあ。
水間 端っこですからね。
加絵 他にもっとちゃんと美味しいところあるし。その分、高いんだけど。
水間 味は削って、その分、安いのはうちって感じで。
青子 なるほど。
水間 まあ、削っていい部分なのか分からないですけど。
青子 はは。

加絵 まあなんかあつたらフォローするし。水間も。

水間 俺、レジ早いで。バーって。

青子 ご迷惑かけます。

水間 いえいえ。

大沼、姿を現さず、

大沼 加絵ちゃん、ちよつと。

加絵 あ、はい。…じゃあ、また。

加絵、去る。

店の外が騒がしい。

客が時々入ってくる。その度に「いらっしやいませ」と言う。

青子 すごいですね。外。

水間 休みの日はよくイベントやってるんですよ。先週はサーカスで。

青子 へー。

水間 や、もう初めて見ましたけどテンション上がりますよ、やっぱ。

子供の数もやばくて、休憩全然取れなかったですから。

青子 ああ、なるほど。

水間 ところで、小山さんは結婚してるんですか。

青子 は、え。いや、別に、してないですけど。

水間 あれ、そうなんですか。すみません。

青子 …。え、なんで…？

水間 や、最近そういう夫婦で越してくる、みたいな人多くて。

青子 ああ。

水間 土地、まだ安いうちにーみたいな。

青子 私は、違いますね、はい。

水間 なんか、すみません。早とちりしちゃって。

青子 いえ。いいんですけど。

水間 でも大沼が言っていましたけど、こっちの人なんですよね。

青子 ええ。大学入るまで。

水間 どちらへんに住んでたんですか。

青子 …あー。

水間 どこですか。

青子 …東の方の、青葉ってとこ、分かる？

水間 え、俺もそっちですよ。

青子 そうなの。

水間 え、え、もしかしてもしかすると、三中ですか。中学。

青子 はい。え。

水間 え、同じ同じ。ウケますね、え、ヤバ。

青子 ああ、そうなんだ。

水間 え、じゃあ先輩ってことですよ。敬語やめてくださいよ、敬語。

青子 いや、ここでは、水間くんの方が、だし。

水間 あ、そっか。じゃあいいや。

青子 はい。

水間 じゃあ、やっぱびっくりしたでしょ、結構変わりましたもんね、

この辺り。
青子 ああ、はい、道も全然違うし。迷っちゃって、昨日も
水間 ですよね。
青子 散歩してたんですけど、違う街に来たみたいで。
水間 俺もそれこそ中学くらいまでは高速道路なかったんで、前の感じ
もなんとなく覚えてるんですけど。やっぱ変わりましたよね。
青子 はい。でも、やっぱりここが一番。
水間 あー。
青子 存在感が。
水間 なーんって、ありますもんね。
青子 ニュースとかでもココ、出来た時、よく特集されてたから、そう
いうサービスイリア特集とか、へえ、こんな風になったんだ、と
は思ってたんですけど。
水間 なんでもありますからね。ほんと。何か行かれました？
青子 いえ、まだ。
水間 まあ、こういうフードコートは普通ですけど、映画館とかシヨッ
ピングモールとか、まあアウトレットモールっていうんですか、
ああいうの。遊園地も入ってるので。
青子 観覧車は目立ちますよね。
水間 そうなんですけど、ぶっちゃけ値段高いだけで、そんな景色も良
くないんですよ、腐っても朝日ヶ丘のままですし。
青子 はあ。
水間 …でも納得しましたよ。
青子 …。

水間 や、すごく懐いてるから、どうしたんだろって思ってたんですけど。
青子 …ああ、加絵ちゃん？
水間 元々知り合いだったってことですよね。
青子 えっと、ああ、姪で。
水間 え。
青子 姪。兄の娘。
水間 え、あ、え、へー、マジですか。
青子 ええ。だから私は、叔母、ですね。
水間 はー、なるほど。…似てないですね。
青子 まあ。
水間 でも、あいつから家族っていうか、なんかそういうの、あんま出
てきたことなかったんで、新鮮ですね。
青子 そうなんだ。
水間 え、両親とも仲悪いんですよ。又聞きなんですけど。
青子 …ごめん、ちよつと分からなくて。
水間 え。
青子 多分、数回しか会ったことなくて、加絵ちゃん、それもすごく小
さい頃で、私、親戚と疎遠だったから。
水間 ああ、そうなんですネ。
青子 はい。
水間 じゃあ久々の再会って感じで。
青子 ええ。
水間 はー…。…めい。…ああ、姪か。

間。

水間 あ、他、何か質問あります？

青子 …。

水間 仕事の方の。いい加減サボつてると怒られるんで。

青子 ああ。えっと、まあ、とりあえずは。

水間 はい。

青子 やりながら、また。

水間 じゃあ、一回大沼のとこ行った方が。他にも手続きあるみたいな

んで。

青子 はい。

水間 ちゃんと、僕、真面目に教えてたって、アピールお願いします

ね。

青子 わかりました。

水間 やつ。

青子、退場。

水間 一人になる。机から本をとり出し、暇をつぶしている。

赤澤 現れる。

水間 いらっしやいませ。

赤澤 しばらく話しかけるか迷ったのち、

赤澤 あの…嘘はいけないと思うんです、あの。

水間 はい？

赤澤 すみません、あの、私が細かい性格だつていうのは分かってるん

です。でも、それ、今は関係ないと思うのであえて無視して、こ

うして喋ってます、喋りますね、はい。あの、さつき夫と化石博

物館の方に行ったんです。ガイドブックにも載ってるんですけど、

この周辺で発掘されたものっていう触れ込みで、すごく大き

くて立派で綺麗だったので、あの、立派ですよ、そこは純粹に

凄いなーって、純粹に、思うんですけど。ああ、で、私、恐竜と

かそういうの好きだから、すごいワクワクしながら入ったんで

すね。けど、展示されてる化石、ほとんど海外で見つかったやつ

なんですよね。ねえ。よくよく見たらここで取れたのなんて、小

さなサメの歯と大量の貝だけじゃないですか、ゴロゴロなんなん

ですか、あの大きな恐竜の模型たち。サーベルタイガーなんてア

ジアにいたわけじゃないじゃないですか何なんですかホント。

ああ、すみません、だから、こんな感じですよとイライラして

て、でも他のお客さん皆そんなこと関係なく楽しそうだったから

係員の人に注意する訳にもいかないし、つてか注意してどうにか

なる訳でもないし、気分直そうかなあと思つてご飯屋さん入った

ら、この、名物の湘南カレー、つて、これは、嘘ですよ。

いやあ、そんなこと。

水間 嘘ですよ。

赤澤 …全部が全部、そうでもないんじゃないかとは思ってますけど。

赤澤 どこがですか。

水間 …もう召し上がったんですか？

赤澤 いいえ。

水間 じゃあ食べてみます？

赤澤 嫌です。

水間 えー。

赤澤 じゃあ特徴教えてください。

水間 は。

赤澤 カレーの。

水間 ホタテが入ってて…まあ、ホタテですね。

赤澤 …。

水間 責任者、呼んできましたよか。

赤澤 私、偽物って好きじゃないんです。

水間 …はあ。

赤澤 好きじゃないんです。分かりますよね？

間。

水間 でも、あの、すみません、別に起こる感情というか、それは本物

じゃないですか。博物館見て、楽しいとか、カレー食べて、美味

しいとか。それぐらいでいいんじゃないかなあって。

赤澤 はい？

水間 色々、ねえ、無理やりひねり出してるんですから、そんな、勘弁

してくださいよ。

間。

赤澤、退場。

水間

いらんこと喋ってしまった。いらんこと喋ってしまった。やばい客に絡まれてる時って、文字通りやばい、とは思っただけど、それでもこれといって為す術もないので、心をシャットダウンするのが通例で、だからこの時も途中まではそうしてたんだけど、何か最後に少しだけ頭を動かしてしまった。ネジを少しだけ緩める感じで、脳がスルッと漏れた。こういう無駄な労力の積み重ねで一日の体力ゲージ減らしちゃうんだよなあ、とかとかなんとか思いながら、作業に戻った。店の表の広場では、大道芸が始まっていた。歓声が上がる。クオリティの低いジャグリングだった。

水間、働いている。

店の表では大道芸が行われている。陽気な音楽が流れている。

櫻井翔からメールが届く。

櫻井 『こんにちは。櫻井翔です。昨日はお返事ありがとうございました。あんな優

しい言葉をくれたの、君が初めてだ。めちゃくちゃ嬉しかった。

そういうえば、この前テレビのロケで沖縄行ったんだ。海、透明で

綺麗だった。星の砂、お札にプレゼントしたいなあとか思っ

てる。ここにURL貼るから、住所をそこに書き込んで欲しい。返

事、待ってます。』

日が暮れて、だんだんと夜になっていく。

4

《睡眠・スタッフルーム》

スタッフ控室・休憩室にて。

水間、椅子に倒れこんで寝始める。

しばらくして、大沼、加絵、青子が現れる。

大沼、水間の肩をトントン叩くが起き上がらない。

大沼 ダメだな、これ。

加絵 水間ってほんと体力ないの。

青子 そうなんだ。

加絵 こうなると起きないよー。

大沼 んー…小山さん、初日で申し訳ないんだけど。

青子 はい。

大沼 今日何時までいける？

青子 え。

大沼 や、こいつ夜シフトも入ってきてさ、あの。

青子 …まあ、十時くらいまでなら。

大沼 よかった。ありがとう。まあ加絵ちゃんもいるから、なんかあつ

たら。

青子 はい。

大沼 じゃあ、こいつ寝かすか。

大沼、枕を用意して、水間を寝かす。退場。

5

《夜について・SA裏・スタッフルーム》

加絵と青子、休憩室にいる。椅子に座り、加絵はスマートフォンを触る。

加絵 今日日曜だから、少しハードかもしれないけど。

青子 そう。

加絵 でも昨日じゃなくて良かったね。やばかったんだよ、バスで団体

さんいっぱいきちやって。

青子 へえ。

高速道路は渋滞しており、テールランプの赤い光が輝いている。

青子 すごいね。

加絵 え。

青子 渋滞。

加絵 ああ。

青子 綺麗。

加絵 初めだけだよ。

青子 そう。

加絵 ずっとあるから、あれ。そのうち、ウザくなるよ。

間。

加絵 私、おばさんのこと、めっちゃ覚えてる。

青子 え。

加絵 おばさんは違ったけど。

青子 すみません。

加絵 別にいいんですけどね。

青子 だって、え、加絵ちゃんと会ったことなんて、ほとんどなかったでしょ。

加絵 そうだけど、おじいちゃんのお葬式で、裏で遊んでくれたの、記憶にない？

青子 え、そうだった。

加絵 縄跳び。二重飛び教えてくれたんだけど。

青子 喪服で？

加絵 うん。

青子 私やばいな。

加絵 あれ、結構わたし嬉しかったんだけど。居場所なかったからさ。

青子 ああ、それは、すみません。

加絵 ウケるからいいけどさ。

青子 …私のこと、みんな、なんて言ってる？

加絵 恥知らず。金の持ち逃げ。

青子 ひどー。ちよっとは、時効になってないかなって期待してたんだけど。

加絵 残念でした。

青子 …お父さん、どうしてる？

加絵 元気。

青子 そう。

加絵 元気だから困ってる。

青子 そっか。

加絵 そうそう。

青子 まだ青葉のそこ住んでるの。

加絵 お父さんたちはね。でも私は家出てて。そうなんだ。

加絵 新田の方、って分かる。

青子 …どこだった。

加絵 …おばさんに伝わる目印ってなんだろう。…オリーブの森。

青子 わからない。

加絵 でっかいワークマン。

青子 …。

加絵 …あ、変電所。

青子 はいはいはい。わかった、多分。

加絵 そうそう、そっちの方。

青子 ても、あっちって結構寂れてたような。
加絵 そうでもないよ。今建売もいっぱいあって。
青子 へー。
加絵 高速道路沿いだから、少し安い。アパートも。
青子 へー。私もそちにすれば良かったな。
加絵 この道が出来てから育ったから、上の人と喋る時いつも不思議。
同じ街なのに、違う景色見てる感じで。
青子 私も変な感じ。こーんな人いるのも。
加絵 うん。
青子 でも中身はあんま変わってなさそうだから。
加絵 ん。
青子 住人っていうか、いる人っていうか。
加絵 ああ。…あ、大沼もだって、ね。もう最初すつごい騒いでたんだ
よ。
青子 え。
加絵 初恋の人が新しく入ってくるんだーって。わーって。
青子 うわあ。
加絵 引かないですよ。
青子 んー、いや、まあ、いいんだけどさ。
加絵 …なに、大沼のこと、嫌いだったの。
青子 いや、そういう訳でもないし…そもそも、どうでもいい存在って
いうか。
加絵 は、え。
青子 や、違う違う、ごめん、言い方間違った。あの、彼のこと全然覚

加絵 えてないから、なんとも思わない、というか。そういう意味で。
加絵 …おばさん、人に興味ないでしょ。
青子 そんなことないよ。
加絵 だって、えー、ひどくない、今の。
青子 二十年くらい前だよ、いちいちそんな、覚えてないよ。
加絵 じゃあ私のことは。
青子 だから、加絵ちゃんは、小さかったから。
加絵 なんか都合よく言い訳にされてる感あるな。
青子 違うって。
加絵 えー。
青子 まあこれからは上司だから、しっかりするよ。
加絵 そういう問題なの。
青子 うん、まあ。
加絵 …いや、うん、いいと思うよ。
青子 褒めてないでしょ。
加絵 そんなことないって。
青子 えー。
加絵 なんか、会う前から、勝手に親近感あったの。おばさんのこと、
親戚みんな勝手だって酷く言うけど、なんとなく似てる気がし
て。
青子 え、どこが。
加絵 んー、行動が。
青子 なにそれ。
加絵 まあまあ。でもなんで戻ってきたの、ここ。

青子 …あー。

加絵 嫌だから出たんじゃないの。

青子 そうだったんだけどね、なんでだろうね。

加絵 …。

青子 まあ、タイミングだね。一回寄つとかなないとダメかなあつて。

加絵 へー。

少し間。

加絵 あ、十時までだよ、とりあえず。

青子 え、うん。

加絵 売れ残りのアメリカンドッグとか、その時間になったら下げちゃうから、好きなの持って帰っていいと思うよ。

青子 あ、うん。

加絵 豆知識。夜シフトの特権ね。

青子 いいね。

加絵 油断するとすぐ太っちゃうけど。

青子 そっか。あ、加絵ちゃんも上がりだよ。

加絵 ああ、うん。

青子 私バイクだから、よかつたら途中まで送るけど。

加絵 あー、いいよ、多分迎えがくると思うから。

青子 あ、彼氏？

加絵 や、ううん、友達。

青子 友達。

加絵 うん。

車が現れる。光で眩しい。

加絵 ほら。

加絵、車に乗り込む。

6

《時間経過（二ヶ月後）・メール・フードコート》

大沼、現れる。自室でメールを打っている。

大沼 青子さん。こんばんは。今日もお疲れ様です。夜シフトの方も、

引き続き、よろしくお願ひします。働き始めて二ヶ月ほど経ちま

すが、特に困ったことはないでしょうか。何かありましたら私に

も遠慮なく聞いてくださいね。

間。返事がない。

大沼 最近冷えてきたので、体調には気をつけて下さい。

間。返事がない。

大沼 もうすぐ試用期間終わるので、今度、昇給の話させてもらいますね。

間。

赤澤 フードコートに現れる。

青子 いらっしやいませ

青子、机などを拭いて退場。

寝ている水間、起きる。

赤澤、席に座り、自撮り棒付きのスマートフォンでレポートを動画で撮る。

赤澤 はい、春ちゃんです。本日のレポートを始めます。…えっと、こ

こには新しいのか古いのか、いまいち統一性がないというか、不揃いなものが多いです。例えば、あそこ、真新しいフードコート
の端には、なぜか古めかしいジュークボックスが置かれていて、
そこからいけ好かないアイドルソングが流れています。そもそも、
この機械から爽やかな未来を謳うご当地アイドルソングって
いうのは似合わないと思うんです。というか不気味で仕方なくっ
て…。

そうなんです。こうして私はまた一つ「偽物」を見つけました。

私は毎週末近くもないこの街に車を飛ばして、偵察に来ていま
す。夫は何でそんなに執着するのか訳がわからないようでした
が、…世直しだと思えます。不正は正さないと、もう手がつけら
れなくなってしまうから、私はこの場所の何が膿なのか、リサー
チする必要がありました。

大沼、自宅にて。

大沼

深夜対応のスタッフから電話がかかってきた。すき焼き用の卵の
殻を、トン、と、割ろうとした瞬間だった。今日も例の女性客が
来て困っているという。週末になると一日フードコートで過ご
す。スタッフからはその正義感の強い言動で「ワンダーウーマ
ン」と名付けられ気味悪がられている。

水間、大沼に相談しに行く。

赤澤

今日は危険性が高い従業員のリストをまとめています。まずは、
ここのフードコートの責任者の大沼。真面目そうではあるがナメ
られているようで、よく陰口を耳にします。嫌なことがあると裏
で「ストライク！」と叫んでいます。意味はわかりません。それ
でも頭の人間だから、一度叩く必要があるかもしれません。

スマートフォンを向けられて嫌がる大沼と水間。

赤澤 次に、水間。あいつは単純にムカつくので許しません。なんとなく嫌いです。

赤澤、退場。

赤澤 加絵を少し探して見つからず。

赤澤 次に小山。小山という性は二人いますが、まず若い女性の方。アルバイトのようでした。彼女は時々、深夜になると、駐車場に止まっているトラック運転手の元を訪れます。その男と一、二言話し、やがて手を繋ぎます。耳のピアスがキラキラ光っています。そして障害者用のトイレに消えていきます。何をやっているのか想像もしたくありません。次に、

大沼、見渡す。

大沼、赤澤に近づく。

大沼 すみません、あの。

大沼 あれ、今日お前の他、誰だっけ。

赤澤 はい。

水間 えー加藤さんとか南条とか、いつメンと、あと青子さんですね。

大沼 すみません、清掃の時間ですので、一度外の方でお待ちいただけ

水間 …南条、ずっと見えないけど。

赤澤 ないでしょうか？

大沼 そう。

赤澤 どのくらいですか？

水間 …ああ、加絵ちゃんとやってんじゃないですか。おい、仕事中は。

大沼 その…そんな長くはないのです。

水間 でもあいつ、今日休憩なしだったはずなんで。

赤澤 …。

大沼 うーん。

大沼 すみません。

水間 「休憩」ってことで。今更ですし、ね。

赤澤 途中ですが、また後ほど。

大沼 まあ。

大沼 え。

青子、現れる。

青子 お疲れ様です。

大沼 お疲れ様です。

水間 お疲れです。

青子 外の清掃、終わりました。

水間 すみません、寒いのに。

青子 …あれ、なんでいらっしやるんですか。

水間 や、ワンダーウーマン来てたじゃないですか。

大沼 追い払ってくれて。非番なのにさ。

青子 そんな、わざわざ。

大沼 まあいいんだけど。

青子、立ち去ろうとする。

水間 あ、すみません、もう一個だけ、いいですか。

青子 はい。

水間 ゴミ捨ててきてもらってもいいですか？ 忘れてて。

青子 はい。

水間、ゴミ袋を取りに行く。

大沼、青子と二人で気まずそう。

水間、戻ってくる。

水間 これです。

青子、水間からゴミ袋を受け取る。

青子 ああ、はい。…普通に裏で？

水間、大沼を見る。

大沼 そうだよ。

青子 わかりました。

水間 お願いします。

青子、退場。

大沼 なんてお前わかんねえんだよ。

水間 アス。

大沼 何だよアスって。

水間 …でも身内にいたら割と最悪ですね。加絵ちゃん。

大沼 あんまいるとこで話すなよ。

水間 まあ僕もお世話になってるから、あれなんですけど。

大沼 だから。

水間 すみません。

大沼、帰ろうとする。帰ったら、すき焼きの続きをしたい。

水間 あ、手伝ってもらっていいですか。

大沼 …。

水間 あの、睡魔が。

大沼 …：しようがねえなあ。

水間と大沼、清掃を行う。

水間 ほんと似てないですよね、あの二人。

大沼 え？

水間 だから、青子さんと。

大沼 そうでもないけどな。

水間 え、どこが。

大沼 …。

水間 まあどつちも美人さんですけどね。

大沼 …。

水間 (青子と) うまくいきそうですか？

大沼 うっせえな。

水間、大沼、退場。

赤いテールランプが明るくなる。

櫻井翔からメールが届く。

櫻井 『櫻井翔です。お返事ありがとうございます。そっか、君が住んでるところに

は海がないんだね。いつか見られるといいね。プレゼントはそのうち届くと思うから、楽しみに待っててね。気にかけてくれてありがとう。こっちはちゃんと、仕事こなせるよう、頑張ります。』

7

《触れる・トイレ・映画館》

サービスイリア内のトイレにて。

加絵、現れる。

その横には男がいる。やがて、男に触れる。

加絵 この前、トイレの壁に書かれていた番号に、電話してみたんです。

触れている。

加絵 そしたら映画館にかかりました。ここのシネコンのじゃなくて、

市内にあるミニシアターの方です。昔から看板は出ていたけどボ

ロボロの見た目なので、とっくに潰れていると思っていました。

電話に出たスタッフは矢継ぎ早に今日の上映スケジュールを言いました。どれも名前も聞いたことのない映画でした。

間。

加絵 いつものように名前も知らない誰かとセックスした後、私はなんとなくその映画館に向かいました。中に入ると、やはりお世辞にも綺麗とは言えない室内でした。受付にはカーテンがかけられ、スタッフの顔は見えませんでした。実はすごいカッコいいオジさんだったら面白いのにな、と思いました。でも、やっぱり汚いオジさんなんだろうな、とも思いました。五分後に始まる映画のチケットを買って、座席につきました。私以外は誰もいませんでした。

加絵の指先だけ男に触れている。

加絵 いい映画でした。すみずみまで希望がなくて。

男、去る。

加絵、男にもらったペットボトルの水を飲む。

渋滞のテールランプの光が、街に注ぎ込んでいる。

加絵 急に寒くなってきたねえ。

間。

加絵 なに、休憩？

青子 いや。

加絵 え。

青子 サボり。

加絵 あれ、覚えちゃった？

青子 一本だけだよ。

青子、煙草を取り出す。

加絵 大沼にチクろぞー。

青子 ちよっと。

加絵 はは。

青子、火をつける。

加絵、渋滞の光を気にする。

加絵 今日すごいね。どっかで事故あった？

青子 上りの方で、みたい。陥没しちやっただみたい。

《優しさ・トイレ前》

トイレ前にて。

青子、現れる。

加絵 え、どういうこと。

青子 なんか道路に穴あいちやったらしくて、車はまって動けなくなっちゃったのが。

加絵 へえ、そんなことあるんだ。

青子 わかんないけど。

加絵 シフト入ってなくて良かったー。

青子 うん。

間。

青子 きつといつか、ひどい目みるよ。

加絵 そうかもね。

青子 本当に。

加絵 さすが経験者。

青子 …。

加絵 やりたそうなやつに、やらせてやってるんだから、むしろ褒めて

もらってもいいんじゃないかなー、って思うんだけどー。

青子 それは無理でしょ。

加絵 あれ、やつぱり。

青子 うん。

加絵 だよねー。

青子 わかって聞いてるじゃない。

加絵 世知辛いですねー。

青子 みんなそうだよ。

加絵 おばさんも？

青子 まあね。

間。

加絵 何も感じないの。セックスしてる時。

青子 …。

加絵 でも熱が逃げていくような、そんな感じが…。

間。

青子 出て行ったら、ここ。

加絵 …。

青子 あつという間だよ。全部、なかったことになる。

加絵 おばさんは、そうやってずっと逃げてきたの？

青子 え。

加絵 なにか、変わった？

青子 なにも。

加絵 …。

青子 でも逃げてきて良かった、って思う。

加絵 …なんで。

青子 つまらないのは自分だって、ちゃんと分かったから。どこに行っ

たって。

少し間。

青子 つて、今週の女性セブンに書いてた。

加絵 え。

青子 うん。

青子 え、え、なにそれ、ひどすぎない。

青子 いい言葉ではあるでしょ。

加絵 ひどー。

青子 はは。でも逃げられる人は逃げた方がいいよ。死んじゃうよりは。

加絵 そんな重い話してた？

青子 してたしてた。

加絵 あっそう。

少し間。

加絵 ああ、おばさんのこと、お父さんもつまない奴だつて言つてた。

青子 ええ？ なにそれ。

加絵 野球ばっか見てたつて。お笑い全然興味ないから、テレビの取り合いしてたんですよ。

青子 ああ、うん。

加絵 信じらんない。

青子 えー、面白いよ。

加絵 なんか、トロいんだよ、野球。ボール投げて打つて。また待つて。

て。

青子 それがいいのに。

加絵 わっかんないなー。

青子 一緒に住んだら喧嘩しちゃうね。

加絵 それ絶対やだ。また説教されちゃうし。

青子 すみません。

少し間。

加絵 おばさんは東京の大学行ったんですよ。

青子 うん。

加絵 出れるアタマと勇気があれば、違つたのかなあ。

青子 こういうのはタイミングと勢いだよ。

加絵 そうかな。

青子 それに加絵ちゃんはバカじゃないよ。

加絵 …別にそこまでは言つてないけど。

青子 すみません。

加絵 まあ、どーも。

青子 うん。

加絵、渋滞の光を気にする。

加絵 やだなー。寝る時うっさかったら。

青子 道路沿いなんだっけ。

加絵 最悪。家賃安いんだけどね。

青子 はは。

加絵 …じゃあ、そろそろ、帰るから。寒いし。

青子 ああ、うん。

加絵 また明日ねー。

加絵、退場。

取り残される青子。

テールランプが光っている。赤く、太い血管のようだった。

光が増していく。青子はそれに手を伸ばす。

9

《道路の封鎖と白》

青子 この日にあった道路の陥没事故は思ったより規模が大きかったみ

たいで、穴が、小さいのから大きなものまで、道路のあちこちで

たくさん発見された。場所は全て、新しく作られた高速道路のエ

リアだった。

間。

青子 原因がわかるまで、隣町の御影と佐山の間で、一時的に通行禁止

となった。そのちょうど中間にあるここへの影響は計り知れない
ものだった。

渋滞の赤色が、少し小さくなる。

青子 昔、この街は夏になると、木々の深い緑で塗りつぶされた。私に

とってこの街の印象は、その色でしかない。家族も友達もお店も
学校も時間も、全部それでできていた。夜、だんだんと自分も同
じものに飲み込まれてしまうんじゃないかって、怖くて眠れな
かった。

間。

青子 深く眠るためにも、違う色で誤魔化す必要があった。一番簡単に

手に入るのは、私の場合も白だった。粘っとした。

青子、片足を上げて、しばらくしたら下ろす。

間。暗転。

青子 さむ。

10

《謝罪・翌日のフードコート裏》

スタッフ控室にて。

大沼が現れる。

大沼 青子さん。

青子 …お疲れ様です。

大沼 お疲れ様。逃げてきちやった、人すぐくて。

青子 まだ落ち着かないですか、避難してるお客さん。

大沼 まあ、ことがことだしね。イライラしちゃってて、みんな。

青子 ですよ。

大沼 やー、怖いよね、ああいうの。

青子 ええ。

大沼 …吸うんだね。

青子 あ、いります？

大沼 いや、もうやめたから。

青子 ああ。

間。

青子 …大沼くんは？

大沼 は？

青子 してるの？ あの子と。

大きな間。

大沼 …してない。

青子 ああ、そう。

大沼 もう、懲りてるっていうか、なんていうか、気持ちがないのは、

寂しくてさ。

青子 へー、意外と遊んでるんですね。

大沼 いや、違くて。

青子、店の表に戻ろうとする。

大沼 あ。

青子、立ち止まる。

大沼 …結構かかるらしいよ、調査。

青子 ああ。

大沼 どれだけ危ないのかも、まだよく分かんないしき。それまでは通

行止めだから、まあ、ここ、入り口ないとな、入れないしなあ。

当たり前か。

青子 …。

大沼 暫く閉めるから、まあ、だから。

青子 …はい。

大沼 うん。…仕事については、再開の見込みわかったら、またメールするんで。…全体に。

青子 はい。

少し間。

青子 じゃあ、そろそろ戻りますね。

青子、退場しようとする。

大沼 あ。

青子、止まる。

大沼 俺、高校ぐらいの時、青子さんと、やらせてもらったことあるんだけど、覚えてる？

間。

青子 …ごめんね。

青子、退場。

大沼 …ストライク。

《取材・フードコート裏》

赤澤が現れる。

11

赤澤 あ。

大沼 え、あ、はい。…ああ。

赤澤 すみません。

大沼 あの、ここ従業員以外入っちゃいけないんですが、すみません、あの、今回の事故のことで取材させて欲しいんですが。

大沼 は、取材。

赤澤 はい。

大沼 あれ、お客様、記者の方、だったんでしうか？

赤澤 いえいえ全然違います。

大沼 え。

赤澤 でもこの場所の問題に対して、調査している者です。

大沼 …すみません、今、手が離せませんので。

赤澤 え、暇そうじゃないですか。

大沼 そんなこと。

赤澤 女にもフラれてたし。

大沼 …あの、趣味悪いですよ。

赤澤 あ、聞こえちゃっただけなんですけど、すみません。

大沼 …そもそも、そういうのはプレスの方に。

赤澤 現場の声を聞きたいんです。ちょっと、ちょっとだけ、お願いします。終わったらすぐ帰るんで。

大沼 いや。

赤澤 お願いします。

大沼 ……終わったらすぐ帰るんですね。

赤澤 はい、もうすぐに、ピューって。

大沼 ……では、少しだけ。

赤澤 ありがとうございます。

赤澤、椅子に座る。大沼も嫌々座る。

赤澤、手帳の取材メモを見る。お菓子などを取り出す。

水筒を取り出して、カップに入れて、大沼に勧めるが拒否される。

赤澤 えーっと、どれからにしよう…。

大沼 裏口から出られますから、お帰りはそちらからお願いしますね。

赤澤 はいはい。えー、

赤澤、大沼を見る。

赤澤 ……では、今回の事故に関して、何か思うところはありますか？

大沼 ……現在調査中ですので、まだ何ともいえません。

赤澤 手抜き工事だった、という話が出ていますが。

大沼 調査中なので。

赤澤 ……色々な噂出回ってますけど、やっぱり有力なの、使っていたコン

クリートの問題だと思っんです。ネットに図面がリークされてますけど、ほら、工事を行なった山下建設、経営的に厳しかったらしいじゃないですか。だから工事費を浮かせて、その差額を着服していたっていうのが…。

大沼 だから調査中なので、わかりません。

赤澤 ……むー。えーっと…。

大沼 ……そもそも、聞くところ間違えてるんじゃないですか。私はここらへんの部署とは全然違うところなんです。私（重なり気味で）では事故後のこちらの対応についてですが。

大沼 ……はい。

赤澤 車を置いていかないといけないっていうのは、正直どうなんでしょう。だって高速道路なんだから、遠くから来た人がほとんど

じゃないですか。なのに、その足を奪って、ねえ、電車で帰れ

は、ねえ、酷いと思いませんか。

大沼 申し訳ありません。お客様の安全のためなので。

赤澤 もうちょっと他になかったんですか。

大沼 ……ないです。

赤澤 ……じゃあその駅までの臨時バス、なんとかならないんですか。遅すぎるじゃないですか、一時間に二本って。何人いると思ってるんですか。

大沼 ……それは…。

大沼 ……何人？

大沼 ……。

大沼 ……。

赤澤 ……お客さん、かなりイライラしてますよ。

大沼 その、市内のバスを活用しているのですが、元々数が少なくて。

赤澤 こういう時のためのリスクマネジメントを考えるのが責任者の役目じゃないんですか。

大沼 …すみません。

満足そうな赤澤。

赤澤 …私、本当は残念なんですよ。

大沼 …は？

赤澤 最初はね、こんな風に変なことが起きる前に膿を見つけて、何とかできないのかなって思ってたんです。なるべく早く見つけて、改善の可能性があればお手伝いをしようと思ってたんです。でも、もともと、全部丸ごと腐ってたって分かったんで、どうしようもないなあってガツカリしちゃって。だからむしろ、壊れるほうをお手伝いしようかなって思ってたんです。

大沼 …え、なに、どうゆう。

水間が現れる。苛立っている。

水間 こんなとこで何してんすか。

大沼 ああ、うん。

赤澤 …。

水間 (赤澤に気づいて) うわ。

大沼 もういいですか。(水間に) ちょっととき、この人連れてってもら

えない、出口の方に。

水間 あの。

大沼 苦手とか言うなよ。

水間 あの、や、いいんですけど、すみません、その前に。

大沼 なに。

水間 なんか、お客さん暴れ始めちゃって。

大沼 は。

水間 やばいんすよ、どうしましょう。

大沼 え、なに、喧嘩ってこと？

水間 や、その規模じゃなくって…えー…。

大沼 なんだよ。

水間 だから暴動っていうか、ショーケースばりーんて割られたり、物壊されたり。すごいたくさんの人が。

大沼 …。

水間 ちょっと笑えてきちゃって、どうしようもなさ過ぎて。

大沼 は、いや。

赤澤 え、どういうことですか。

水間 …そもそも、なんでこの人いるんですか。

大沼 なんか、入ってきちゃって。

水間 ええ。

赤澤 教えてください。

大沼 …で、で。

水間 …最初、ここに避難してるお客さんだったんですけど、

赤澤 はい。

水間 あんたに言っていないから！

大沼 いいから、もう。

水間 …あの、湘南カレーを食べてたお客さんが、これ、ニセモンじゃねえかって、騒ぎ始めて。

少し間。

水間 だから、カレーで。

大沼 そんな、今更なに。

水間 そうなんですけど。

赤澤 ほらー。言ったじゃないですか。

大沼 …。

水間 …だから、いつもと同じように、はいはいスマセンって聞き流

していたら、周りのお客さんも騒ぎ始めたんですよ。

大沼 いやいやそんなことで？

水間 まあ最初からイラついてたじゃないですか。

大沼 無茶苦茶な。

水間 理由なんて何でもいいんですよ。

大沼 やばそう？

水間 やばいですね。

大沼 …。

水間 あの、すみません、いま聞くことじゃないんですけど、

大沼 なに。

水間 何で「湘南」カレーにしちゃったんですか。

間。

大沼 そりゃあ、お前、ホタテが入ってるから。

水間 …ホタテ好きなんですか？

大沼 そんなに。

水間 ええ。

大沼 貝って歯に挟まるからさ。

水間 …湘南は？

大沼 海っぼいかなって思っ

赤澤 湘南にホタテはいませんよ。

間。

水間、あきれて椅子に座る。

大沼 え、で、どうなってるの、今。

水間 ああ、化石館の方にもいつちやって…偽物？を壊しまくってます。さっき一瞬、煙とかも見えました。火、かなあ。

大沼 …警察は呼んでくれたの？

水間 呼びましたけど、いつ来るんでしょうね、こういうの。

大沼 …。

水間 あの、一応報告っていうか、なんていうか。

大沼 ああ。

水間 どうしましょう。

大沼 …ああ、うん。

間。

大沼 …じゃあこのまま裏から。

水間 まだ他にお客さんもスタッフもいますし。

大沼 ああ…。

水間 …。

大沼 …でも、俺が行ってもねえ…って、思うんだけど。

水間 いや、責任者はいないと。

大沼 …だよね、うん。

間。

大沼 まあ、うん、ちょっと確認してくるから。

水間 はい。

大沼 じゃあ、お前はその人を。

水間 はい。

大沼、恐る恐る移動。

水間 結構危ないんで、気をつけて。

大沼、移動。

水間 めちゃくちゃ危ないんで。

大沼、移動。少し笑う。

水間 …危ないですよ。

大沼、怖がりながら退場。

間。

水間、席を立つ。

水間 あの、じゃあ、こっちです。

赤澤 良かったですね。

水間 は。

赤澤 化けの皮剥がれて。

水間 ああ、そういうのいいから。

赤澤 えー強がりー。

水間 …。

赤澤 こつこつリサーチ続けてきて良かったです。

水間 …え、なに。お前なにかしたの。

赤澤 ちょっと本当のことを流しただけですよ。

水間 …。

赤澤 道路の情報、いま皆さん一番興味あるかなあって思って。だって酷いんですよ、全部データラメで、

水間 早く来いよ。

水間、裏口の方へ行こうとする。

赤澤 でもね、これで良かったんじゃないですか。

水間 あのね、

赤澤 ほら、いくら可愛い服着ても、ブスが着たらブスのままでしょ。

だから、こういう場所、なくなっても仕方ないと思うんです。無理してジタバタしても見苦しいだけですもん。

水間 ……

赤澤 私ね、やっぱり嘘はいけないと思うんですよ。

水間、椅子を蹴飛ばす。

水間 色々、ねえ、遠くに行けない人間は（ここで）騙し騙し踏ん張ん

ないと、ねえ、いけないんで。

赤澤 ……

水間 ……もう、勘弁してくださいよ。

赤澤 退場。

間。

加絵、現れる。

加絵 あ、いた！ ちょっと、早く来て欲しいんだけど、もう。

水間 ……

加絵 大沼じゃやっぱダメだからさ、ねえ。早く。

水間 ……

加絵 え、なに、聞いているの。

水間 母親がボケ始めてさ。まだ六十だったばっかなのに、早いよね。

でも自分でボケたって認めるのが怖いみたいで、よく聞いてくんの。幸太、私、ボケてないわよねって。はは、いや、ボケてるよって、言いたいんだけど…言えないままなんだよなあ。でも、最近、それさえも聞いてこなくなってるさ。

加絵 ……

水間 俺、ここ再開しても、多分もう戻れないわ。介護しなきゃ。

水間、退場。

少し間。

加絵、退場。

12

《暴動・サービスエリア・駐車場》

暴動が起きている。たくさんの人が入り混じっている。

大沼、現れる。赤い誘導棒を持ち、蛍光色のジャケットを着ている。

人々を誘導しようとしているが、うまくいかない。

大沼

いくら声を出しても誰も聞いてくれない。誰も耳を貸してくれない。人が多すぎて、暴れている人と逃げている人の区別もつかない。やっぱり全部ほっておいて逃げれば良かった。右から左に、左から右にビュンビュンビュン流れていくお客さんを見ながら、あれ、そもそも出口ってどっちだっけ、という気分になってきた。裏口へ逃げてください！ 裏口へ逃げてください！ 裏口へ逃げてください！ っって当たり前のように言っていたけれど、え、ああ、そうだ、そもそも正面から出られる普通の出口？ 入り口？ エントランス？ っって、ああ、ここには、この街には無かったから、裏口しかないから、いま皆、困ってるんだよねあって、思っつて、こんな、辞書の意味通りの「右往左往」が見られているんだなあと、思っつて、ああ。

大沼、殴られてよろける。

大沼

誰かに硬いもので殴られた。ツーツと、頭から血が流れ始める。量は多くないようだった。血なんて久しぶりに見た。本当に久しぶりに見た。一滴二滴三滴と落ちる。雫を目で追うと、その先には地面。アスファルト。

でもそこに、小さい穴ができています。例の陥没だろう。そして中には小さい雑草が生えていた。血はその雑草に当たっていた。

大沼、周囲を見渡す。だんだんと水が溜まり始める。

大沼

周りをよく見ると、たくさんの人が走り回ったせいで、道路の穴がどんどん増えてきていた。その下には全部、びっしりと雑草が生えている。なんだ、やっぱ手抜き工事だったのかよ、っって思っている、目の前で力士みたいに大柄な男が、その穴に足を取られて、派手に転んだ。擦りむいた手と足から血が流れる。男は年甲斐もなく、わんわんと泣き始める。あまりにちゃんと「わんわん」言っているから犬のようだった。その横でまた違う女が転んだ。彼女もわんわん泣き始める。

次第にあたりは怒号や悲鳴から、泣き声に変わり始める。大人も子供もみんな泣いていた。やがてあまりの音量で、この泣き声は、サーブスエリアの外、朝日ヶ丘全体にも響き渡っていった。そして皆、もらい泣きをしてしまった。悲しい理由も分からないのに、わんわん泣く。わんわん泣く。初めに流した少しの血は、その涙で全て洗い流された。

赤い誘導棒の光が消える。

街はたくさんのお水に満たされている。

大沼、退場。

13

《櫻井翔より・メール》

櫻井翔からメールが届く。櫻井が現れる。繭に包まれている。

櫻井　こんばんは、櫻井翔です。お返事ありがとうございます。

ところで、私は櫻井翔本人ではありません。気付いてると思うけど、別の人間です。男でもありません。

プレゼント、無事届いたでしょうか。本当はアドレス、寿司とかピザとか勝手に注文するのに使わないといけないんですが、本部に送っていませんので、安心してください。

私は、東京に住んでいます。世田谷でスーパーのレジ打ちをやっています。

さつき鮮魚コーナーの入れ替えをしていた時に、商品のサンマと目が合いました。匂いだから、肥えて太っていました。けど、死んでいました。死んでるなーと思いました。

そしたらぷつんって、何かが切れた音がしました。比喻ではなく、本当に聞こえたと思います。そしたら、嘔吐していました。

商品にです。

今、休憩室で休ませてもらっています。

私、死んじゃうかもしれません。

でもその時に思い出したのが、家族でも友達でもなく、迷惑メールの相手のあなたでした。顔も見たことないのに、あなたのことを考えています。不思議ですね。

返事をくれたのは、あなたが初めてでした。

嬉しかったです。

それだけを伝えたかったのです。あなたの幸せを心から祈ります。

14

《出発・加絵の家と、雪の高速道路》

加絵、現れる。

櫻井、加絵を繭に招き入れる。

やがて加絵にプレゼント（星の砂）を渡す。

一度抱擁する。

櫻井、加絵を繭に残して、退場。

加絵、その場で横になる。

やがて、包まれた繭を脱ごうとする。脱皮のようだ。

脱ぎ終わった後、立ち上がり周囲を見渡す。

そして身辺整理、荷造りを始める。

舞台上はだんだんと物がなくなっていく。

青子、現れる。その様子を見ている。

加絵 ここ出ようと思つて。
青子 え。
加絵 うん。
青子 へー。そうなんだ。
加絵 仕事もなくなつたし、都合よく。
青子 ああ。でも急じゃない。
加絵 タイミングと勢いなんでしょ、こういうの。
青子 や、まあそうは言つたけど。
加絵 ちよつと、会いたい人ができて。
青子 …それだけ？
加絵 うん。
青子 え、どんな人なの。
加絵 顔もわかんないんだけど。
青子 …。
加絵 出会い系とかじゃないよ。おばさんじゃないんだから。
青子 今もやつてるみたいに言わないでよ。
加絵 え、違うの。
青子 あのね、
加絵 ごめんごめん。私もやんないよ。必要ないから。
青子 本当かなあ。
加絵 トラスト・ミー。
青子 はいはい。
加絵 おばさんはどうするの。めでたく無職だけど。
青子 同じでしょ。

加絵 またどつか遠く？
青子 実家に行こうかなつて。
加絵 え、まじで。
青子 まあ、今決めたんだけど。うん。
加絵 …逃げるのがポリシーじゃないの。
青子 まあね。…でも向き合うときは向き合わないとなつて。
加絵 ガンバー。
青子 そつちも。
加絵 うん。
問。
加絵 さみしくなるね。
青子 …私たち、会つてたつた三ヶ月くらいだけど。
加絵 時間とかあんま関係ないよ。
青子 出発する前にホームシック？
加絵 うつさいな。
青子 そのうち毎日忙しくつて、全部忘れちゃうから、そういうの。
加絵 そんなこと、
青子 慣れた方がいいよ。その方が楽だから。いちいち悲しんだり懐かしんだり寂しくなつたりするのは辛いよ。
加絵 …慣れたくないな、私は。
青子 …。
加絵 …手紙書くから。

青子 え、メールじゃなくて。

加絵 だって味気ないじゃん。形に残らないし。

青子 まあいいけど。

加絵、荷造りを終える。

加絵 じゃあ。

加絵、出発する。雪が降り始める。

青子 加絵ちゃんが出発する日、少し季節外れの雪が降っていた。そも

そも、ここはあまり雪が降らない土地だから、彼女は運ないなあ
と言って笑っていた。

天候に極端に弱い電車は止まっていて、車もチェーンなんて持つ
てないから動かない。出発を延期するのかと思ったら、封鎖され
た高速道路をつたって、歩いていくらしい。

加絵、歩いていく。

青子、その様子を見ている。

青子 ああ、見送る立場って、こんな気持ちになるのかと、初めて…。

加絵、雪の中を歩く。

加絵 高速道路には、まだ回収が終わっていない車の列がずっと先まで

続いている。陸路は使えないから、ヘリコプターで一台ずつ釣り
上げているらしい。この調子だとどれくらいかかるんだろう。

加絵、一歩一歩踏みしめる。

加絵 雪に足を取られながら、気温は0℃近いっていうのに汗だくにな

ってきた。ああ、やっぱ失敗したな、と思う。電車の復旧、待て
ば良かった。勢いって時には怖いものだなって思う。

加絵、振り返る。

加絵 丘を登って、なんとか隣町との境まで来た。少しノスタルジック

な気持ちになって、来た道を振り返ると、そこには馴染み深い我
が故郷、はなかった。しんしんと降る雪に、街全体がすっぽり、
白く埋められてしまっていた。全く別の場所に見えた。ぬめる緑
もまとわりつく赤も、全部綺麗に白く塗りつぶされていた。それ
は、今まで私が、あそこにいる間に、一番見たかった景色だっ
た。今じゃ、なかった。この何処かに、おばさんはいるんだなあ
と思った。

青子、もう加絵のことが見えない。

青子 その後、加絵ちゃんとは何度か手紙のやり取りをした。初めは一

ヶ月に一度、そのうち一年に一度と、だんだんと届く期間は空いていき、やがてどちらからともなく、送るのをやめてしまった。その先、一度も会うことはなかった。

15

《プロローグ》

以下、手紙のやり取り。

加絵 おばさん、こんにちは。お元気でしょうか。私は元気です。無事東京に着きました。会いたって言ってた子とも合流できて、暫くルームシェアすることになりました。手紙は、こちらの住所にお願いします。

三ヶ月の時が経つ。

青子、煙草を吸い始める。

加絵 ねえねえ、褒めてください。見事、仕事を手に入れました。バイトじゃないですよ。契約社員です。いいい。新橋のOLとして街中歩いてやります。

さらに二年の時が経つ。

加絵 実はこの前、音楽フェスに行くために、朝日ヶ丘の近くを通りました。少し、ドキドキしました。おばさんは、今あの場所に住んでいるんですね。あなたの気持ちを分かる時が、来るのでしょうか。

青子、去っていく。

さらに四年の時が経つ。

加絵 ご報告遅れましたが、私、結婚しました。びっくりしましたか。相手はまさかのメキシコ人です。まさか、なのかな。つきましては、今度そっちの国に移住することになりました。海を渡ります。不思議な感じですよ。

さらに十年の時が経つ。

最後の手紙は、本当は届かなかったのかもしれない。

加絵 前の手紙から、何年振りでしょうか。子供ももう十歳です。全然私の言うことを聞いてくれません。：私がおばさんに会ったのって、このぐらいだったでしょうか。とても懐かしく感じます。おばさんは忘れちゃったって言ってたけど、私は今でもあの時のことを覚えています。一緒に縄跳びしたの、すごく楽しかったです。すごく楽しかった。いつの間にか、こんなに遠くに来ちゃったけど、またいつか、会えたら嬉しいですよ。

微かに煙草の匂が残っている。

終

本作品の著作権は、作者である柳生二千翔に帰属します。

上演許可などのお問い合わせは、作者本人まで。上演する際は有料、無料公演に関わらず、必ずご連絡ください。

MAIL

yagyu.works@gmail.com